

弟三人でそこに泊まり込み、勉強に精を出した。

一級上の兄は、大学受験に失敗し家業を継いだ。僕は、高校三年になって大学受験を勧められたが、工業高校からは無理と判断し、社会人となった。

その年に周辺道筋の国有地の払下げがあり、待望の我が家の礎の工事にかかった。

三十 偉大なる父。慈愛に満ちた母

偉大なる父は、昭和五十八年の夏、八十二歳で天寿を全うした。慈愛に満ち、どんな困難にも耐え忍の強かった母は、平成七年の秋、八十六歳で天寿を全うした。

新矢酒店開業のころ、ラジオから流れた石川県出身の哲学者、暁鳥 敏の格言が身に染みて忘れられない。

○ 十億の人に 十億の母あらむも

我が母にまさる 母 ありなむ

○ ほろほると泣く 山鳥の声

父かと思い 母かと思う

戦争、棄民、平和

大阪府 渡辺 糺

一 生い立ち

私は昭和六（一九三一）年九月一日。神戸市湊川町で生まれた。父は現在の電電公社勤務で、電話工事人であった。母は、私を生んでから産後の肥立ちが悪く、私が一歳になるのを待たずに死亡した。赤子の私は母の死も分らずに、よちよちとはっては家のあちこちで母を尋ね探しては泣いていたという。後年、多感な年ごろになって、この母の心情を思うにつけ、母は「私が死んだらこの子はつらいとき、悲しいとき、どのだれに向かって、何を訴えるのであろうか！」と若くして死を迎えた無念さ、心残りの深さはいかばかりであったであろうと察し、涙したものであった。

私が幼稚園に入るまで、父は懸命に私を育て、近所の人々の優しさにも恵まれ、すくすくと育つ

た。父はその技能を生かし独立するため、単身朝鮮羅津に渡り、私は伯父に預けられた。伯父は千葉県船橋市の競馬場勤務で家の周りは田畑であり、トンボや蝉を追いかけて走り回っていたので、運動会などで走ることにかけてはだれにも負けたことはなかった。

二 父と羅津で暮らす

昭和十三年、船橋市立葛飾尋常高等小学校に入學、ここでも短距離走は学年トップであった。二年の進学前に、朝鮮羅津から帰国した父の友人に連れられて渡鮮し、羅津で父と暮らすことになった。転校に際し、先生が別れの紹介で「朝鮮や満州は極寒の地で、飛んでいる雀が凍死して空から落ちる」と言われたので、私はびっくりすると共に焼き鳥が食べられると嬉しかったものだ。

羅津に転居した昭和十四年二年生のときの記憶では、油紙を敷いたオンドルが珍しかったのと、一般に日本人が朝鮮人に対して威張って生活していることが記憶に残っている。父は再婚しており、

赤ん坊の妹が一人いた。一年後、ハルビンに移住した。移動の夜行列車では暖房が効いており、満員の人いきれでむっとしていた上にニンニクの匂いが充満していて、頭がくらくらして倒れそうであった。

三 ハルビンでの生活

昭和十五年、ハルビンの桃山小学校三年生に編入された。編入手続きなど最初の一日には母が付いて来てくれたが、キタイスカヤ通りはロシア人街で、道路は石畳であった。その道路を馬車が行き交っているが、日本人の姿は見られなかった。建ち並ぶ商店の看板は、当然のことだがロシア語であった。翌日からは一人で登校したが目印となるものはなく、通行人に日本人はいないので道を聞くこともできず、ベソをかいて家に戻り、母に連れられて登校した。

桃山小学校は典型的なロシア風の建物で、L字型で正面二階の屋上にはドームがあった。近くに留置場か監獄があったのか、手足を鎖に繋がれた

囚人が列をなして歩いているのをよく目にした。四年生のときに松花江の近くに転居したので夏は川岸で遊び太陽島に泳ぎに行った。河幅は広く、遊覧船は外輪船で水車が両舷にあるものや、船尾にあるものなど様々であった。日本軍の江防艦隊が治安に当たっていた。冬は凍結した江上を、太陽島まで二・四人乗りの大型の人力ソリが船の代わりに客を運んでいた。春には流水が互いにつぶかって、音を立てながらかなりの早さで流れてくる。子供が面白半分に氷に乗るが、岸に戻れず溺死する事故がよくあった。私も一度やってみたが、河中に流された氷から岸に戻るため義経の八艘飛びよろしく、氷から氷に飛び移りかろうじて岸に戻った経験がある。そのときは、死に物狂いであったことを覚えていて、ロシア正教の祭りの一つである禊みそぎが、真冬の松花江の氷を切り取って、プールのようになった冷水の中へ裸で入る行事があり、その真似をした日本人が凍死した事件があった。変わったこととしてあまりに河幅が広く、風

景もロシア的なので、日本から来た国会議員が河岸から太陽島を眺め、あれがロシアかと言ったとかで「何と地理を知らない」と地元の新聞でたたかれたことがあった。

父は電話架設を業としており、山間僻地への出張が多く、匪賊、馬賊の襲撃を受ける危険性が高かったので、国から拳銃・小銃・弾薬の携行を許可されていた。父の友人で、匪賊に襲われて死亡した人も多いという話をしていた。父は電柱が切り倒されているのを見ると、すぐ関東軍や警察官の駐屯している町へ逃げると言っていたが、幸い襲われたことはなかった。このような職業柄、召集は免除されていた。

母は看護婦と産婆の資格を持っており、自宅で産院を経営していた。

昭和十七年、小学校五年生のとき転居し、郊外の桜国民学校に編入となった。桜国民学校では、ノモンハン事件での戦死者の遺骨がハルビン駅を通過する日を英霊の日と定めて、その日は追悼の

意を表して全員日の丸弁当を持参する決まりになっていた。年に数回はハルビン神社参拝があり、各国小学校の児童の行進が行われたが、白系ロシア人の児童の列が縦横整然と揃い、先頭を歩む鼓笛隊の勇壮かつリズムミカルな曲の演奏に乗って手を振り足を踏み、その一糸乱れぬ様は目を見張るものがあった。

ハルビン市には忠霊塔のほか、沖・横川二烈士の碑があった。沖・横川二烈士は、日露戦争当時スパイとして活躍したが、生活習慣の違いから日本人と見破られ銃殺された。ハルビンは極寒の地だから、冬の神社参拝では神官の祝詞や先生の話の間に凍傷にかからぬために、ひそかに足踏みをしていた。手には軍手を二枚重ねで着けた上に、本格的な防寒用毛皮手袋を着用した。学校での冬の体操はアイススケートであり、運動場の周りに十〜十五センチメートルの盛土をして、その中にホースで水をまいてリンクを作った。

当時、ハルビンは東洋の魔都と呼ばれ、各国の

スパイがいて全体として治安は必ずしも良いとは言えず、道外と呼ばれた地区はその入り口に交番があるだけで、日本人立入禁止と言われていた。小学生は全員、全学年集団での登下校であった。

四 撫順での学校生活

昭和十九年、私は父の仕事を継ぐために露天掘りで有名な撫順市の撫順工業学校電気科に入学した。撫順は、良質炭を露天掘りできる世界一の炭鉱と誇っていた。学校の寮には空室がなく、取りあえず旅館に下宿し、後に副校長宅に下宿させて頂いた。鉄筋二階建ての大きな家で二人暮らしをさせていたご夫婦に優しく気遣って頂き、毎日を楽しく過ごしていた。そのうちに勤労奉仕が始まり、撫順炭鉱で働くことになった。地上での簡単な奉仕であった。休憩時、炭鉱を見ると全体的にすり鉢状に掘られていて、鉢の壁に螺旋状に鉄道線路が敷かれていて、数十メートル下の鉢底の線路の先端で、親指ほどに見える機関車が石炭車を引っ張っているのが分かった。

学校では、教練が重要な科目になってきた。木銃で突きの教練や匍匐前進、夜間行軍など配属將校の指揮の下、厳しく鍛えられた。配属將校は、当時全校の先生の中で最も怖かった人である。お蔭で軍人勅諭、特に不動の姿勢の定義は、今でも暗誦している。これらは名だたる文学者の作とのこと、いずれの文章も簡潔で要を得ていることでは名文であると、今でも感心している。

豊富な石炭を活用していた撫順市内は、地区別に給湯のセンターがあり、地下のパイプを通して各戸に熱湯が送られ、各戸では部屋の暖房、風呂などもコックを開くだけで事足りたし、道路も凍結することはなく、一年の学期末には入寮したが大きな乾燥室があり、常時ガンガンと蒸気の通る音がして、数十人分の洗濯物が干せる広さだった。洗濯物は絞らずに広げたものをパンパンとたたき伸ばしておくだけで、二、三時間でアイロン掛けをしたのと同様にしわもなく乾いていた。寮の部屋は細長く、窓に面して机と椅子が通路を挟んで

壁際にベッドと戸棚が置かれ、一室に二十五人が居住していた。

戦時中のことで寮生活は軍隊式で、起床ラッパと共に起き上がりながら掛布団をたたんで頭に掛けておいて、敷き布団を三つに折りにたたんでそのうえに掛布団をきちんと乗せ、洗面、着替えを済ませて、上級生の週番生徒の点呼を受ける。人数報告時「総員〇名、事故〇名、現在員〇名、番号！」「一、二……三」と番号呼称が間延びでもしようなものなら、終了後総員ビンタである。隣にある関東軍の連隊の起床ラッパと同時刻で、点呼終了に遅れるとこれまたビンタである。

不寝番は、一、二年生が終夜二時間交代での勤務である。期末試験時になると、五、六年生を希望の時刻に起こすのは、不寝番の任務である。希望起床氏名・時刻はノートに記入されている。起こしそびれると、翌朝ビンタである。三年は中間になるので、上級生からのビンタを受けることはなく、また下級生に制裁することは禁止されてい

た。私は二年生になり、後一年間の辛抱でビンタから逃れると思っていたのに終戦となり、撫順工業学校での寮生活はビンタで明け暮れた。上級生の中には、陸に海に空に志願兵として出征する者も多く、戦死の知らせが学校に通知されると、その都度学校葬が催されたが、学内では不良学生として鼻つまみだった者も、品行方正、学力優秀であったとの弔辞が読まれ、参列した生徒はあぜんとしたものである。

五 両親を求めてハルビン帰行

昭和二十年、夏休みに父が仕事で新京（長春）へ出張するので休暇中だったが早めに学校に行くことにし、ハルビンを出て、父の友人宅に泊めてもらったが、その夜に爆撃を受け家中の人がびつくりし、右往左往した。ソ連機による空襲だった。ここで父と別れて撫順に戻った。寮は夏休み中は閉まっているので、入学当初下宿していた旅館に泊まることにした。

昭和二十年八月十五日、窓の明るさと暑さで目

が覚めた。学校は夏休みでだれもいないだろうし、今日はどう過ごそうかと寝床の中で考えていると、表通りから泣き声のような悲鳴にも似た大勢の人の声がした。外に出てみると「日本が戦争に負けた、これからどうなるんだろう？」と声高に話していた。宿の女将は私に「いつまでも寝ている場合ではない。大変だ！ 大変だ！」と言っている。

二年生の私にはどう考え、何をすれば良いのかわからない。取りあえず学校に行ってみると、午後になって寮生や下宿中の生徒たちが集まり、お互いどうするか話し合ったが、まずは親元へ帰ろうということになり散会した。私も旅館に戻り、人々の話を聞き状況判断しようと考えた。当時、満州国のすべての産業は日本人が管理監督をしていたので、人々はそれらの管理者がいなくなると、職場にも行けず家に籠もり身の安全を図るだけであったので、一切の進行が停まってしまった。ハルビンに帰るため撫順駅に行ったが、中国人の駅員が構内のあちこちにいたが、仕事をやっている風

ではなかった。切符売り場は開いていたが、いつ奉天（瀋陽）行きの汽車が出るのかは全く不明であった。一応切符を購入し、翌日早朝駅に行くことにした。

翌早朝に撫順駅に行ってみると、前日同様人は集まっているが、わいわい騒いでいるだけであった。その後二日ほど様子を見ていたが、ソ満国境の開拓団などから南下して来た人たちの話が伝わってきた。ソ連軍の侵攻で死んだ人も多く、運良く逃れて来た人たちも着のまま裸同然で、途中暴徒に襲われ怪我をして、血みどろで命からがら逃げて来た人も多かった。この人たちも乗り物は何も無く、歩きづめの逃避行であったと言う。入ってくるニュースは悲惨なことばかりだった。

私は、ハルビンに在住している両親の安否を確認するため、北上しようとした。しかし旅館の人々も近所の方々も、口々に「やめておけ、北の方の人たちが命からがら南下してくる状況で、もしかすると戦場になっているかもしれない。まして列

車も他の乗り物もないのに、何百キロメートルをどうして行けるのか」と言われた。分別のある大人なら、こんな状況で北には行かないであろうが、私はまだ子供であった。甘い判断ではあるが、何となく両親は無事ハルビンにいらつという気がして、ハルビンに行く決意を固めていた。このときハルビンに行かなかつたら、私たち親子は生き別れになって、今の私はなかつたと思つている。

寮生それぞれが家へ帰ることになつたが、私は撫順からまず奉天に行かなければならなかつたので、駅で切符を購入し、時刻表に関係なく中国人が運行している列車に乗つて奉天駅に着いた。駅構内は、国境地帯から南下して来た人たちがいっぱいであつた。ほとんどの人が負傷しており、女性には暴行を恐れて頭を丸坊主にしたり、顔や手足に墨を塗っており、しかも衣類を満足に着用している人は少なく、筵か麻袋をまとうだけの人が大半であつた。男性は現地解散した関東軍の、いわば敗残兵であつた。勝利に酔う中国兵などの日本人

に対する暴行略奪で、百雷が一時に落ちるような有様であった。私はそんな中で、北へ向かう列車を探してうろろろしていた。だれかが○番ホームから北行きの列車が出ると言うので行ってみると、すでに列車は動き出していた。皆一斉に走ったが、足の弱い約半数の人は乗れず、別れ別れになってしまった。数時間後、列車が本線から外れ出したのに気が付いて飛び降りたが、知らなかった者はそのままどこへ行ったのやら、永の別れとなつてしまった。

しばらくして、機関車だけが北を指して走って来たので、機関車後部の炭水車に飛び乗ったが、ここでも数人が乗り損なつた。中国人を含め十数人が、転落しないように身を寄せ合つて乗っていた。突然、後方から飛行機の爆音がしたので見るとソ連機で、いきなり機銃掃射を浴びてきた。機関手は、必死に石炭を焚きスピードを上げたが、線路を走る列車は良い目標であった。掃射をしては引り返してまた掃射。三度ほど繰り返して飛び

去つた。この間十人ほどが重傷を負つたが、幸い私はかすり傷も負わなかつた。機関車は物資集積地と思われる駅に停まつた。機関手はもう先へは行かない、自分の都合で勝手に機関車を動かしたのだと言う。途方に暮れて駅ホームを歩き回つたが、出会つたのはソ満国境でソ連軍と交戦し、重傷を負つた日本兵数十人を乗せた無蓋貨車であつた。兵士たちは腕をがれ足を飛ばされ、血みどろであつた。苦痛に呻き、断末魔の叫び声をあげていた。私たちに向かつて「仇を討ってくれ！」

「口惜しい！」「このままでは死んでも死に切れない！」と叫びながら、何人もの兵が目の前で死んでいった。竹槍や銃剣だけでソ連軍戦車に立ち向かい、虫けらのように踏みつぶされていく兵士にとつて、私たちにまで仇討ちを頼まなければならなかつた心境は察するに余りあり、私たちは「仇はとりませう。英霊よ安らかに」と祈るほかなかつた。こうした兵士たちの犠牲と引き換えに私たちが今日があるのだ。

日本人のどこが悪くて、無条件降伏した人間をここまで虐げるのか。戦争は、勝算があつてやるべきだとは、戦国時代を始め幾多の歴史の教訓である。諺に「勝てば官軍、負ければ賊軍」とあるがその通りである。

ここでただ一つ良かったことは、一緒にいた級友の一人が。貨車で南下中の家族と出会えたことだ。私たちは口々にその幸運を祝した。この日以降、何日を経たか記憶がないが、食べるもの飲むものは何も持っていなかったから、貨車が停まるたびに線路脇の瓜など盗って食べていた。周囲の悲惨な状況に、自分の命があと半日あるのか、明日は生きているのだろうかという思いが強く、空腹を感じた記憶はない。

一週間余り過ぎて、ハルビンの手前に列車が近づいたとき、ちょうど山間の谷間の地形であった所の両側から、機関銃や自動小銃の掃射を受け、列車は停止。ソ連兵が列車を取り囲み、日本人以外の乗客を降ろし、我々日本人の所持品検査を始

めた。通称マンドリンという自動小銃の引き金に指を掛け鬼気迫る面相で、我々一人一人の横腹に銃を突きつけての身体検査であった。私も両手を挙げて降伏の姿勢をとったが、初めてのことであり、両手を伸ばし真つすぐに挙げたのは良いが、ときが経つとともに手が痺れ、下げようにもその瞬間に引き金が引かれるかと思うと、怖くて耐えるしかなかった。以後、引揚げまで何度かこのような目に遭ったが、手の挙げ方を変えてしのいだ。肘から先だけを挙げることにしたのである。そうすると、二十分でも三十分でも平気だった。検査終了後、停車していた貨車に押し込まれた。そこにはすでに日本人が多数いた。話では、シベリアに送られるのではないかということだった。今日の我々を含めるとほぼ満員に近く、明日にはシベリア行きだと話していた。日が暮れ暗闇になると、脱走を図る人が出て、警戒していたソ連兵に銃撃された。

私たちは最初からのグループは二十数人だった

が、ここまでたどり着けたのは野口君と私の二人だけだった。初め座席に座っていたが、ソ連兵が窓を狙って銃撃してくるので、二人は網棚に乗り横になって寝ることになった。車両が広軌なので網棚もそこそこ広く、いつとはなく寝入ってしまった。夏とはいえ北満の夜明けは寒く、二人とも目覚めた。脱出も途絶えたのか、周囲はシーンとしていた。野口君と相談し、「よし、暁の脱出をしよう！」とばかりに二人はそとと車両を降り、匍匐で約五十メートル進み列車を離れ、あとは一刻も早くこの場所から逃れたい一心で、一目散に走った。後ろから自動小銃の一斉射撃を受けたが、もう止まらない。無事近くの中国人部落に逃げ込んだ。二人とも荷物をもったままだったのには、我ながら呆れた。

部落に入つてソ連兵に出会ったが、彼らには日本人と中国人の区別がつかなかったのである。別に怪しまれることもなく、ここから歩いてハルビン市街に入った。野口君とは行き先が違うので、

お互いの今後の無事を祈りながら別れたが、以後消息不明で今日に至っている。

六 ハルビンで父母と再会

ハルビン市内の治安は良く、半日ほど歩いてやっとマンションの自宅に帰り着いた。聞けば、父は私を探しに撫順に行き、一週間ほど毎日撫順駅に行つたが、運行される列車もなく、空しく帰宅することを繰り返したという。これまで便乗可能な列車があつたなら、親子はバラバラになつて一緒に日本の土を踏めなかつたろうと思つた。人にはそれに備わつた運があるのである。母に聞いたら、父は現地解散した関東軍の兵士たちが武器を持って集まり、侵攻して来るソ連軍を相手に一戦を交えようと、塹壕まで掘っていたのを説得し解散させたという。

最初満州に入つて来たソ連軍は、囚人部隊であつた。彼らは正規軍が派遣されて来るまでの間、老若男女の別なく殺戮^{さつりくり}陵辱^{りやうじよく}の限りを尽くした。ソ連軍も、この囚人部隊を本国に送還しようとし

て憲兵部隊が来たが、囚人部隊が送還を拒んだため市街戦が演じられたが、憲兵部隊に対抗できるはずもなく、一掃され正規軍が派遣されることとなった。

正規軍もまだ若い兵士が多く、二十歳前後と思われるのが大多数で、独ソ戦の影響から基礎教育も不十分で手の指の数以上は数えられないし、掛算割算は全くできず、日本人から強奪した腕時計のゼンマイが切れて針が止まると壊れたと思つて捨ててしまい、次の時計を強奪し、腕には常に四〜五個の腕時計をはめていた。

終戦後のソ連兵だけでなく、現地人による日本人への暴行は目に余るものがあり、日本人は一歩も外に出られなかった。外に出て日本人と分かる、たちまち現地人が集まり殴り殺され、死体は道路に放置された。またある日本人は、馬二頭の尾に片足ずつ結ばれ、馬をたたいて八つ裂きにされ、捕まった女性が衆人環視の中で犯された挙げ句に撲殺されたなど、数々の惨事の話を知人の中

国人から聞かされた。

昭和初期、日本が満州に進出したときにもこのようなことがあったようだ。列車が襲われ、日本人が人質にとられて身の代金を要求されたり、馬賊に捕らえられた日本人を関東軍が捜索に出動することもあった。小学生のころ、夜間就寝中にも屋外で銃声をしばしば聞き、翌朝登校の際、射殺された死体を数多く見た。このほかほろ酔いの日本人とすれ違いざまに、その首に縄を掛け身体ごと肩に担ぎ、窒息死させるということもあったことを見聞いた。満州進出当時、大和民族が世界一であり、他は劣悪であるとした風潮が鼓吹されていて、日本人は中国人・満人よりも優位な存在と考えていた。これらへの憎悪反感が、敗戦後一度に吹き出してきた感がある。細部はよく分からないが、ロシア革命後逃れて国外へ出た白系ロシア人も、進駐して来たソ連兵からは敵視され虐待のターゲットとなり、日本人同様暴行陵辱された。私も一度、屋外で犯されている白系ロシア女性を

見たことがある。冬のことだから軍用外套を被せての行為であったが、ソ連兵による日本女性への陵辱もひどく、見つけ次第手当たり次第、家族全員の前で犯されることもしばしばで、ために家族全員が手榴弾で一家爆死するという痛ましいことがあちらこちらであったことを知っている。

ハルビンでの最終の住居は、今様に言えば二階建てのマンションで、天井は高く中二階を充分作れる高さがあり、さらには二階の天井裏も高く広く子供は立って歩けるほどであり、隠れ家として絶好の場所となった。ソ連兵は、ハルビンから日本人男性をシベリア送りとするため、日時場所を定めて出頭を命じた。それ以後に発見された者は、その場で射殺すると警告し、実行した。このことから逃れるため、各家庭の搜索があるときは三、四世帯の大人の男性は、まとまってそれぞれの家庭の床下や屋根裏を避難場所とした。男狩りは中学生といえども逃れることは不可能で、このことはハルビンは無抵抗の老若男女のみとし、意のま

まに暴行略奪しようとしたのであった。桜国民学校の同窓会の一人も捕まり、ひと冬を食も衣もろくに与えられずにシベリアの荒野を転々とさせられ、治安回復後に戻って来たが、衰弱が激しく間もなく死亡した。我が家でも点検の都度屋根裏部屋に避難し、用心のため数日を過ごすこともあり、食事はザルに入れて点検孔からロープを垂らし受け取っていた。各家庭に何回も搜索に来るので、隠れ場所もその都度変更し、前日点検済みの床下、天井裏にはいつくばっていた。

ある日、一階の藤木さん宅の床下（人が四、五人座れるくらい土を掘った）に男性四人が潜んでいるときに搜索があり、頭上の床板をソ連兵は銃の台尻を引きずりながら屋敷中を捜した。床板はそのたびにギシギシときしきみ音を立て、我々が潜んでいる空洞と共鳴する音をたてるので、もはや命もこれまでと銃殺される覚悟を決めたが、よほど鈍感な兵だったのか、床のきしきみ音の変化に気付かず三十分ほどして退去し、我々は命拾いした。

その後、最悪とも言える事態が発生した。それはソ連兵が来たとの連絡で、私たち親子と近隣の数人が急遽屋根裏部屋に隠れていたところ、中庭が騒々しいので覗き窓から見ると、物置小屋に隠れていた男性が見つかり、小屋の前に立たされ目隠しをされているところで、一個分隊くらいのソ連兵が自動小銃を構え、号令一下射殺された。直後、射撃を終えたソ連兵の一人がふと後ろを振り返り、何気なく頭を上げた視線と覗き窓から見ていた人の視線とが合ってしまった。ソ連兵は大声を挙げ、全員伏せの姿勢で我々がけて一斉射撃に移った。「さあ、大変」今度は我々が殺される羽目になった。私は声も出ず膝はがくがく震え、大人の後ろについて屋上に出て、反対側の屋根の斜面を音を立てぬように走り抜け、隣のマンションの屋上に飛び移り、一階にある昨日搜索済みの家の床下にもぐった。これが、洋間の床を上げて和室にしたもので、高さが低く私は難なくもぐれたが、太っていた父にはかなり窮屈で、シャツは

破れ胸や腹は擦り傷で、皮膚からは出血していた。のちほど母の見聞によると、ソ連兵は射殺をなかなか止めず、その後階段から屋根裏への点検孔を見つけ、梯子を掛け用心のため中国人を先に登らせ、その後ろから銃を構えて次々と屋根裏部屋へ入って行ったが、見つからぬため一時間ほどして去って行ったという。しかし数人はいるという確信は持ったはずで、建物の周囲はソ連兵に包囲され外へ逃げ出せず、夜明けとともに人数を増やし、各家を風潰しに探すであろうことは想像に難くない。

翌日、家族中といっても私は中学二年生、妹は幼いので、父母が相談しての結論は、ソ連兵に射殺されるより自分たちで死のうと、父が所持していた拳銃に実弾を込め、まず私からという順になったが、父は引き金に指はかけたものの引けない。私もこの世の終わりのと思うと、知らず知らずハラハラと涙がこぼれた。父は「撃てない」と言って泣いていた。まさしくそのとき、母の友人で

同業の産婆を開業していた山下さんが、ドアを開けて飛び込んで来た。「何をしているの？ 諦めず何としても生きるのだ」と言っただけの手から拳銃を取り上げ、「ご主人は次の捜索で見つかり次第射殺されるだろうから、支那服に着替えて、どこか難民収容所になっている場所に多少治安が良くなるまで潜んでいて、安全と分かってから帰宅しなさい！」とときばきと指示し、私たちに実行させた。父が出て行っただけからは幸いに家宅捜索は行われず、母子三人生活を続けられた。

二カ月ほどして、ソ連兵による日本人男性狩りは終わったので、父はソ満国境からの開拓団の人たちが避難していた小学校から帰宅して、やっと親子四人が揃った生活となった。この間、外出しての食糧の買い出しはできず、父の知人の中国人の大王の棟梁に衣類とか貴金属を渡し、これを売って金に換え、食糧を仕入れて家まで運んでもらった。棟梁にとってはこれは命がけの援助で、日本人にこのような好意的行動をすることがほかに

に洩れば、死を意味した。終戦前に父に世話になった恩返しだと言っていたが、現在の日本人には望むべくもない義侠行為である。かなりプライドの高い人物で、やっと治安が治まったころ、父がキャバレーを建て共同経営の話を持ちかけたところ、「自分は将来大を成す心算である。後年名を挙げ、世に知られるようになったころ、あの男は昔水商売の建物を建てたとあつては名に恥じる」と言っただけで聞かなかったということもあつた。ともあれ、親子四人の命を繋ぎ止め得たのは、全くこの方のお陰である。しかし、何分にも秘密を要することであつたので、その後の縁は日と共に薄れていった。少し外出も安全になったころ、父は自分が酒飲みであることもあつて、どこからか日本酒を樽で仕入れて来て、小売りを生計を立てた。

昭和二十年の冬には、ソ連軍にも囚人兵はおらず正規兵のみとなり、若干の手当をもって日本人男性を使役に採用した。私が行ったのはメリケン

粉の工場で、近隣の大人と一緒に他にも使役の人がおり、総勢五十人ほどで袋詰めと運搬業務が主であり、つらかった記憶はなく、ソ連兵との交流が面白かった。第二次大戦中、ソ連国内は当時の日本より相当疲弊していたらしく、兵士は二十歳前が大半でろくに教育も受けておらず、使役全員の点呼の際縦横の掛算ができず、ために日本人の中から一人選り人数を報告させていた。人数をこまかすことなどはいと易く、毎回交代で長時間の休憩をとっていたが、最後までバレなかった。工場内に運動場・砂場・鉄棒があり、あるとき昼休みに何気なく私が懸垂を数回やったところ、兵士たちはびつくりし、もつとやれと大勢集まって来た。彼らは体格は頑丈で、鉄道の枕木を左右に一本ずつ計二本を持って楽々運ぶ力があつたが、鉄棒を知らず、ぶらんとぶら下がったままただの一回も懸垂ができない。あまりの喜びように私も調子に乗り、蹴上がりや前方回転をやってみせると、まるでサーカスを見ているようにびつくりし、自

分たちのパンやバターを持って来て、これをやるからもつとやれ、チーズをやるから俺にも見せろと、三、四十人の兵士がガヤガヤとうるさかったが、以後私には非常に親切であつた。怖かったのは狙撃兵で、彼らは一般の兵士との一緒の訓練はなく、各自が思い思いに望遠照準器付きの狙撃銃で練習していたが、面白半分に私たちの付近にあるものを的にして撃つこともあり、すれすれに弾が飛んできて命が縮まった。私が五十メートル離れた木の葉を撃たせても、百発百中の精度であつた。将校は、二十メートルほど離れた所に空き缶を置き拳銃の練習をしていたが、いつだれがやっても命中率は甚だ悪く、以後拳銃は至近距離でない限り撃たれても安心だとの思いがした。運かもしれないが、撫順からハルビンへ戻る一週間強の間、機関銃、自動小銃、拳銃等で何度も撃たれたが、かすりもしなかったことを思い出した。さすがに将校は教育を受けたと見え、話す内容が兵士と異なり、ソ連囚人兵や戦争勝利国民による

暴行、陵辱、虐殺等に対し、日本人は個人的にもあるいは結束してでも立ち向かわないのか、といったことを質問した。だれかが「天皇陛下の命によって無条件降伏したのだから仕方がない」と言うのと、これほどの目に遭いながらなお天皇の命令を聞くのかと、立場が逆でスターリンがそう言ったとしても、自分たちは決してこのような状態に甘んじることはない、反乱を起こすと言い、日本人は何とも不可解な民族であると言う。いかに日本民族が虐待されたかが分かるというものである。命が惜しいのか、プライドがないのかも言われた。ある新任の将校はドイツ兵捕虜収容所を例に出し、できもしない無理なノルマを課され徹底的に地獄の責め苦に遭っても、ドイツ兵は全力投球をせず、見せしめに銃殺しても全く効果はなく、監督のソ連兵の方が諦めたと言う。全ドイツ兵がそうだとは言わぬが、比較すると日本人の方が御し易いと言う。そう言いながら、シベリア抑留で衣食も不十分なまま極寒の冬を越させ、数多くの

日本人を死亡させている。

飢えと寒さが日増しに強くなり、治安が回復したとは言え日本人が道路を大手を振って歩くなどは夢のまた夢のことで、家の中にじっと鳴りをひそめている日々であった。悲惨なのは国境周辺からの避難者で、住むに家なく市内の小学校に入っていたが、食も乏しく衣類も不十分、衛生状態は極端に悪く発疹チフスが流行蔓延した。毎日数十人が死亡し、死体はこちこちに凍り、手の施しようもなく、運動場に積み上げガソリンを掛け焼くとのことだったが、話は聞いても助けに行けず、切齒扼腕するだけであった。年が明けると、ソ連兵と交代に中国兵が進駐して来た。

七 国府軍と共産軍

当初は蒋介石の国府軍で、共産軍は八路軍と呼ばれていた。どちらもハルビン全域を制圧しておらず、市街戦が行われた。国府軍兵士は中国の標準語を話すが、一般の満州在住の中国人は、地方訛りのきつい満語を話すので通じにくく、私たち

は学校では標準語を習い、街中では満語で話していたので両方が分かる。そのため両者の仲介として通訳してみたことも数度やらされた。軍服、兵器等装具全般に国府軍が断然優れており、共産軍は田舎の無教育の子供供した若者で、銃は日本軍の三十八式という旧式の装備で、訓練もろくに受けていない兵士が大半であった。この共産軍がなぜ勝てたのか、その一因を終戦後逃れて自宅へ来ていた関東軍の下士官だった人が話していた。

終戦時、関東軍の各部隊は部隊長の決断で去就が別れた。国際法に基づき兵員、武器、弾薬を進駐して来る戦勝国軍に引渡す部隊長と、責任は一切俺が負うと言い全部下に武器、食糧、衣類を分配し、急ぎ戦線から離脱し帰国せよと言って自分一人残り銃殺された部隊長もいたとのこと。員数を合わせてソ連軍に引渡された兵士はシベリア送りとなり、飢えと寒さと苛酷なノルマの三重苦での死が待っていた。現地解散された兵士は日本へ帰る術もなく、行くあてもなくさ迷っていた。ど

うせ一度は捧げた命と諦めてもいたので、日本兵を採用しようと血眼だった国府軍、共産軍の状況を見てそれぞれの判断で国府軍、共産軍に入隊した。最前線で白兵戦になると、一歩も退かない命知らずの兵がいる。近づくと怒号は日本語である。すぐ戦闘を止めて、待遇についての情報交換が始まる。国府軍の待遇は良くなく敗残兵扱いだが、共産軍は若い軍事訓練も受けていない農村出身の若者で、プロの兵士は喉から手が出るほど欲しい状況で、日本軍の兵は下士官、下士官は将校に昇格という待遇であったので、国府軍に入っていた日本兵はほとんど共産軍に寝返った。彼ら兵士には、現実の日本内地の情報は全く伝わっていなかった。生きて日本の土を踏むなどという希望も持たず、戦時中聞かされてきた鬼畜米英の占領下では、家族の無事も望めないのではないかなど帰国の希望すら持てなかった。彼らは怖いもの知らずの精強部隊となつて、国府軍を苦しめたということだった。

一方、ソ連兵が撤収し中国共産軍への交代が行われ、通用していたソ連軍票が一夜にして紙くずになるということもあったが、母の機転で、情報の遅い田舎に行つてうまく米や野菜などの物資と交換した。

昭和二十一年の夏には、ハルビンも進駐して来た中国共産軍に制圧され、日本人集合住宅の強制明け渡し及要求された。我がマンションも例外ではなかった。父が決死の覚悟で司令部と交渉し、接収の規模を縮小してもらった。父の決死の交渉で、事情のある者は部屋を確保できることになったが、勝手なもので我も我もと事情を申し立て始めたので、父は一切の事情を認めないことにして、やっと落ち着くひと幕もあった。

八 引揚げ

終戦から一年が経ち、南満州からの引揚げも順次行われ、北満の我々にも帰国の喜びが訪れようとしていた。ハルビン市在住の日本人地区割りとして、それぞれの団体ごとに長、副、渉外担当者を

決め、引揚げの準備をすることになった。携行可能なものは、一人に付きリュックサック一袋だけで、中身は着替え、野宿用の毛布、食糧と定められた少額の現金等であった。絶対不可とされたのは、写真、貴金属、決められた額以上の現金、印刷物などであった。土地・家屋を含め一切の財産は、どこからも何の補償もないまま放棄させられた。我々は棄民となった。

駅頭では全荷物を広げ、共産軍の検閲を受けた。万一禁止物品が見つかり、即没収で、罰としてその団体全員が引揚げ一時中止、許可が出るまでそのまま駅頭に留め置かれることになっており、私たちが部隊の前にそのような例があった。日本人帰国に際し共産軍は各産業の運営上必要な技術者、管理者を強制的に残留させるため、全員に今までの職種、職務内容を申告させた。父は単なる電気工事人夫と記入した。ハルビン在住でその会社ハルビン市内とあっては、嘘を記入しても周囲、特に使用人であった中国人からすぐに分かることで、

正直に記入せざるを得ない人も多く、同じマンシヨン一階にいた会社経営者家族は、小学生の女兒を含め全員が残留となった。私たちが出発の日、この残留家族が見送ってくれたが、残る人たちは明日も知れない身で、これが今生の別れと思うと、見送られる私たちがその心情を察し涙また涙で、ただ無事を祈るばかりであった。

ハルビンの駅外れの貨車置き場で、身体検査があった。荷物は全部を地上に並べ承認を受けて初めて乗車できた。乗車したのは、ただ床面だけの貨車であった。乗車してからもいろいろな問題が起こり、渉外担当である父は多忙を極めた。食料の調達、大小トイレの問題、病人、妊婦への対応等、共産軍幹部との折衝などである。高級将校の中には、女性の夜とぎを要求する者があり、応じなければ列車を発車させないなど、強引で困却するばかりであったが、団員の中にいた水商売の婦人が身心御供を買ってでてこと無きを得たこともしばしばであった。こういったことは、国府軍に

バトンタッチされてから一層ひどくなった。幼児を抱えた母親が、わずかな食糧を手に入れるため、高粱畑で中国人に身を任せざるを得ないなどのこともあった。

九 引揚げ途次の松花江の悲劇

松花江を挟み徒歩数時間の荒野が、ここを通過する引揚げ日本人にとっては地獄の地帯であった。国府軍と共産軍が日本人引揚者から荷物を強奪するために、一時休戦したという地帯である。数日前には、ある引揚者団体が悲惨な目に遭ったとのことであった。この無法地帯をどれだけ短時間に通過できるかが、生死の分かれ目になるので、炎天下持てるだけ持った荷物は重く、必死で歩く大人の急ぎ足に着いて行けず、泣き叫ぶ子等、地に倒れ起き上がるかもしれない老人、遂には命の次に大切に持って来た荷物も次々に捨てられていく。産気付いて出産し、血みどろの赤子を抱いた母親が必死で歩いて行くなど、地獄絵図そのままであった。私たちも同様で、四歳の妹も、背にリュック

クサツクを負い、泣きながら懸命に歩くのを母親と一緒に励まし、手を引きずって強引に歩かせた。この妹も引揚げ後、間もなく栄養失調と引揚げ途次の幼い身体への無理がたたって、やせ細った挙げ句、ろうそくの火が消えるようにはかなく亡くなった。無事に生を全うし今日ある自分を省みて、あのときこの身がぶつ倒れようとなぜもつと妹の面倒を見なかつたのかと悔やみ、夜空の星に涙して、「妹よ、許してくれ、堪忍してくれ」と詫げる悲しさ、口惜しさは消すことができない。

十 残留孤児の悲劇

葫蘆島での乗船までの一カ月の間には、世に残留孤児と言われる子らが大量にきた。それぞれがこの命、明日はあるか、今日夕刻まで持つのかと、弾丸の飛来は無くとも真綿で首を絞められるの例えの通りの辛苦、己は死んでもこの子だけはいかに現地に残し中国人に託した親の気持ちをだれが察してくれようか。

残留孤児の肉親探しの来日が長らく続いているが、名乗ろうにも申し出られない心情の人もいると思う。許せ、許せ、自分たちだけが安穩と引揚げたわけではない。共に満州の荒野で死ぬよりは、生を全うしてくれとの親心からではあったが、今となつては言い訳に過ぎないと自責の念に駆られているのではないかと思われる。

葫蘆島に到着。港に我々が乗る日本海軍の機雷敷設艦の艦尾に日の丸が翻っているのを、丘の上から眺めた全員が立ち上がり、はらはらと涙した。

十一 引揚げ、航海

玄界灘の荒波を越え、やっと念願の博多港に入港したが、先着の引揚船が数隻入港しており、手続き検疫等で上陸は一週間後となった。この間、祖国を望しみながら空しい日々でもあった。同じグループのまだ四十歳代の男性が、夕食時箸をポロリと落としたかと思うと、そのまま突っ伏した。今にして思えば脳溢血か心臓麻痺でもあったろうか。地獄の辛酸をなめ、やっと安どしたのも束の間。

間、妻と幼児二人を残しての他界、その心情は察するに余りある。薄汚れた破衣、虱の身体で上陸、書類上の手続きとDDTの散布を受けた後、苦勞を共にした人々と別れ、母の実家、長崎へと汽車の旅。車中の乗客は「これが同じ日本人か」と思われるほどの冷たさで、汚らしいものでも見るような視線であった。これが、夢にまで見た熱望の祖国の扱いであった。

十二 引揚げ後

母の実家に親子四人で寄食したが、どこでも同じ食糧難で主食は米にサツマ芋を混ぜたもので、ご飯それ自体が甘く不慣れな私たちは食が進まず、四歳の妹は急激にやせ細り、危篤になった。医者を迎えに私は山道を駆け下った。走りながら「妹よ、死ぬな。ここまで生きてきたのだ、頑張ってくれ」涙が滂沱^{ぼうた}と頬を伝い、泣きじゃくりながらこれが日本か、これが祖国の仕打ちかと万感胸に込み上げてきた。この祈りの甲斐もなく、戻ったとき妹は死んでいた。「このようにしたのはだれ

だ、仇は必ず討つ」と誓い、詫びる心のはかなさ。私は徒手空拳を呪った。

私は父と二人、三菱重工長崎造船所で、五十トン漁船の船大工の人夫として一年間働き、長崎工業学校二年生に転入したが、間もなく新制の六三三制が導入され、長崎工業高校併設中学部二年生となった。三年生になりさらに長崎工業高校電気科入学となったが、元來が旧制の電気科二年生であったため、全員生徒先生共に替わらず、従って中学部卒業式や高校入試入学式などすべて無しであった。父は独立して、漁業無線機の販売取り付けを商いとした。

昭和二十四年、二十五年と中国、韓国による日本漁船の捕が始まり、船もろとも船員・漁網等も拉致されたため、網元は倒産、父も倒産の危機に見舞われた。再起を図るため父の出国前の友人を頼って神戸に行くことになり、私も同行。アルバイトで生計を立てて神戸大学を目指し、昭和二十六年四月同学電気工学科に入学した。二年生の

とき、予想通り父は倒産。神戸で一からやり直す
ことになり、最終的に電信電話工事渡辺組を設立
した。私の戦後は終わっていなかった。

私の満州・十三歳の思い出

大阪府 丹生 幸美

プロローグ

満州の大地

短い春と秋……アカシアの並木道

赤土の露出した山々

春……山腹に咲き乱れるアズノ花

夏……真夏の太陽は強く、青空の晴天続き

秋……高粱畑の穂をわたる冷風

冬……ペチカで鳴くコオロギの子守歌

煉瓦の家の軒に太く長い氷柱

スケートに夢中になった長い冬

豊かな自然、そして厳しい自然

広い大陸で育まれた私の子供時代

その故郷！ 満州は！

今も私の心の中に脈打っている

日本の敗戦